

## ものづくり産業を支える仲間たち⑭

## 自動車総連—本田技研工業株式会社埼玉製作所

今回は、西武新宿線の新狭山駅から徒歩10分ほどに位置する本田技研株式会社埼玉製作所を訪問した。駅舎から、工場の建物に刻印されたHONDAの赤い文字が目飛び込んできた。

埼玉製作所は、HONDAにおける4輪乗用車の上位機種の本格的な量産工場として昭和39年に設立。エンジン・プレス・溶接・塗装の各工程をはじめ、完成車のエンジン搭載や各種部品の組立てから検査まで、一貫した生産をしている。現在、レジェンド・アコード・オデッセイ・CR-Vなどの乗用車をNO1ラインとNO2ラインの二つの生産ラインで、それぞれ、1日に1100台、1050台と、合計2150台生産している。全体生産車の6割が輸出用であり、半分は米国向けである。工場敷地面積は38万平米で、敷地には緑も多く、環境保全と省エネ対策に力をいれていることが肌で感じられた。

設立当初は、製造する乗用車も小型であったが、段々と大型にシフトしてきて、工場自体は手狭になってきているようだ。狭いスペースをできるだけ有効に効率的に使うべく、さまざまな工夫がなされている。工場内の上の空間も部品を搬送するスペースに使っているため、天井は他の工場と比べると低い感じだ。本当はもっと天井が高いのであるが、上の空間を二つに仕



組立ラインの作業風景

切って、上の2階部分を、エンジンやドアや、いろいろな部品が縦横無尽に、しかるべきところに向かって移動している。溶接部門は機械化されているが、狭いスペースを機種に応じて器具を取り替えながら、たくさんの製造ロボットが狭いスペースの中をまるでサーカスのように華麗にスピーディーに作業していた。

二つのラインも特

色を持たせている。NO1ラインは比較的人の手が入るようにしてあり、フレキシブル性をもたした傾向にしている。一方、NO2ラインの方は、最新の設備を入れて、自動化するなど、2つのラインの特色を活かし、相互補完しながら、市場のニーズに柔軟に対応している。

1日に2150台生産するこの工場では、一台作るのにかかる時間は48秒とのこと。一台の乗用車の組み付け部品点数は1600点以上というから、それらを組み合わせる工程が、48秒とはすごい速さであるにもかかわらず、作業工程で組立てている労働者の働く姿は、てきぱきとスピーディーに自分の工程に取り組んでいた。素人目ではそれほど、あくせくしているようには見えなかった。これは、機械化するところは、徹底して機械化し、効率化しているせいだと思った。そう感想を伝えたら、一般の人がパットはいると、見た目には簡単のように見えるが、なかなかついていくことはできないとのこと。一般の人が、ラインに入って一人前の作業を一通り覚えるのには、OJTで2週間を目安としているそうだ。特にNO2ラインでは乗用車の機種を7~8種類扱っているので、機種ごとの仕様によっても部品が違うので、それ



自動車心臓部であるエンジン組立

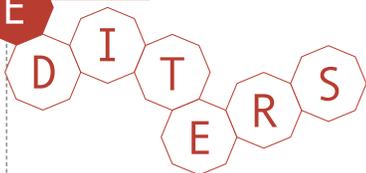
らを覚えることを含めて2週間はかかるという。

今回の表紙のイラストに描かれた工程は、自動車の心臓部である「エンジン組立」の部分であり、ここは機械ではできない作業工程である。職場としては、細かい作業工程であること、取扱い部品が重要部品を扱っているところから、重要作業工程として位置づけられている。特に、作業のマニュアルの中で、取り扱っている部品が、人の生命に直結するような大事な作業工程であることを意識させるように教育に力を入れているとのことであった。

工場には、従業員が5300名で、期間従業員が1200名ぐらい働いている。従業員も期間従業員も同じ服装で、一緒に、同じ車をつくっている。自分の仕事に誇りを持って、生き生きと働いている姿が印象に残った。早番は朝6時半から午後3時15分、遅番は3時5分から11時半の2交代制、一週早番をやると、次の週は遅番と代りばんこのサイクルとのこと。ちょうど、取材を終えて、駅に向かうとき、早番を終え、帰宅する人たちと一緒にになった。(美)

AUTUMN  
issue  
[秋号]

E from



◆今号の特集では、「エイジフリー社会」を取り上げた。2040年には、65歳以上の高齢人口が33%

を超え、何と国民の3人に1人が65歳以上となる超高齢大国日本を迎える。まさに、生涯現役社会、エイジフリー社会にしないと、とても3人に1人の高齢者を支えていくことは不可能である。そのための条件整備や労働組合の役割などについて、清家教授をはじめ、海外の事例を含めて紹介した。労働組合としても、発想の転換を迫られている。

◆エイジフリー社会といえ、年配でも、生き生きと生涯現役で活躍されている高齢者の先輩方がたく

さんいる。その代表選手であった、IMF-JCの労働リーダーシップ西日本コースの名物校長竹中正夫先生が、8月17日に80歳で惜しくも逝去された。第1回以来37回まで37年間に渡り校長を務められた。竹中校長の開校式での、目をつぶっての情熱的な式辞に圧倒された受講生は多い。その情熱を継いで来年1月も38回を開校する。竹中先生のご冥福を心から祈ります。(美)